

オーストラリア職員海外研修 参加報告書

国際交流センター 清水大助

0. はじめに

今回、オーストラリア・Edith Cowan University における初の職員海外研修に同行した。

入職後から3年温め続けてきたものであり、ようやく形となったプログラム。

単なる視察や知識の習得ではなく、「価値観に揺さぶられる体験」を通して、職員一人ひとりが自らの立ち位置を再確認し、将来に向けた視野を広げることを目的としてきた。

その意味で、この9日間は私にとって非常に感慨深いものであり、同時に大きな手応えを感じる体験であった。

以下、各プログラムの所感を述べたい。

1. 11/30（日）「ロットネスト島の歴史・文化とSDGsの取組みに関する視察」

ロットネスト島を訪れて、最初に強く感じたのは、この場所が現在見せている穏やかな表情と、過去に背負ってきた歴史との落差だった。

今のロットネスト島は、よく整備されたサイクリングロードが島を巡り、シュノーケルで泳げる白い砂浜のビーチが島中に点在する。

老若男女がフェリーに乗って集まり、ちっちゃい子が楽しそうにわいわいしている。

インド洋が視界いっぱいワッと広がり、とにかく、海の色がどこまでも青い。

－ いわゆる「楽園」である。

しかし、島内を歩けば、砲台があちこちに残っている。弾薬庫も残されている。弾薬を運ぶ錆びた線路も静かに在る。

当時、敵艦を監視するのが女性たちの役目であって、その写真を目にしたとき、現在の目の前に広がる穏やかな光景が、決して最初からそこにあったものではないことを、思い知らされた。

同じ場所でありながら、時代が変わることで、役割も意味もここまで変わってしまう。

歴史とは、決して遠い過去の出来事ではなく、現在の風景の下に折り重なって存在しているものなのだと感じざるを得ない。

しかも、その、攻める側に、大東亜共栄圏を掲げた日本が含まれていた事実を思うと、感慨は単純なものではなくて、現在の穏やかで平和な景色を前にしながら、どこか苦笑を含んだ感情が湧いてくるのは避けられなかった。



島にボツンとあるミュージアムでは、アボリジニの歴史にも触れた。

さらに気分が重くなった。

イギリス人が入植して、たった数年のうちに原住民の人口が十分の一になるほど、遊びでバンバン虐殺されて、という記録を前にすると、「人間も何なんだかなあ、、、」と考え込んでしまう、考え込まずにはいられなかった。



ロットネスト島は、確かに美しい。

しかし、その美しさだけを切り取っても、どれほど風景が明るくても、その下に眠っているものは消えない、というか、むしろ、明るさが増すほど、暗さがはっきりと見えてきてしまった。

絶対に、お気楽にバカンスとしてロットネスト島に行くのが「正解」だったのだと思う。

実際、そういう場所としては、今まで完璧だった。

ただ、今回は「研修モード」だったから、歴史のほうが勝手に深く割り込んで来た。

何だかイヤになってしまった。

海に飛び込んで、インド洋の冷たい水を全身に浴びてから、やっと、少しだけモヤモヤが晴れた。



2. 12/1（月）「国際部業務の紹介／オリエンテーション／キャンパスツアー」

ECUでの初日は、極めて印象深いものとなった。

今回、初めてこのプログラムを実施するにあたって、カウンターパートの担当が本当によく頑張ってくれた。国際交流のみんな5名が総出で出迎えてくれた。

実際のところ、サイモンが全体を形作ってくれたのだが、どれだけみんなして頑張って準備をして来てくれたのかは、何にも言わなくても分かるウェルカムだった。

言葉がなくても、あれは伝わる。

この実現の瞬間、私は感無量だった。感無量ってあんまり味わわないけれども、こういうものだ、しっかり確認した、ありがたかった。

同時に、これから5日間のプログラムが続くと思うと、単純にワクワクした。



AUSに12月に来たのは初めてだったので、何か違うのかなと思っていたが、ECUのキャンパスは何にも変わらなかった。

キャンパスツアーではケイトが案内してくれた。ケイトは、たどたどしい日本語を丁寧に話す。

かわいいというか、非常に好感が持てる。うまい下手より、相手への姿勢が出る。

彼女は3年ほど足立区に住んで区役所で働いていたらしく、だから、いつも懐かしそうにウェルカムしてくれる。それが今回も変わらないものだから、素直に嬉しかった。



3. 12/1（月）「多文化環境における大学職員のウェルビーイング確保の政策」

特に印象的だった講義の一つ。

「人生の豊かさとは何か」と言ったとき、仕事だけではないと断言できる。

仕事以外に、家族や仲間との時間があり、遊びがあり、趣味がある。そこが充実していないと、人間は全く面白みがなくてつまらない人間になってしまう。これは、観察の結果としてそう思う。

ECU の職員は、ワークライフバランスの考え方がかなりしっかりしている。

欧米的と言ってしまうえばそれまでだが、行動として徹底されている。

例えば、私は、金曜日、特に午後以降は新しい案件についてはやりとりを送らないようにしている。なぜなら、めちゃくちゃ嫌がられるからだ。「分かってねえなこいつ」と思われる。

これはルールというより、共有された感覚、「暗黙の了解」というもので、休みの前は新しい案件は言うてはいけない。

あと、リアンやベサンにも改めて聞いたが、みんな 5 時 6 時には帰っている。サイモンなんかは、サーフィンがやりたいがためにパースに移住した。

いかにプライベートな時間を充実させるかを、みんな当然のこととしている。

これは正しいと思う。人生が充実していない人に、良い仕事なんか、できるわけがない。

今回分かったのが、この考え方が、もう ECU という大学の考え方でもあって、すでに制度や運用に実装されていたこと。

「私生活を充実させることこそが、逆に仕事の質を高め、それが大学の利益に直結する」—
そこまで組織として腹落ちしているのがすごいと思った。

このときのプレゼンターは、LNG の大企業で働き、博士号も取ったプロ人材で、大学全職員のウェルビーイングを推進させるために、わざわざ雇われていた。

日本じゃ難しいだろう、一部のプライム市場の進んだ大企業などでは同じような取り組みもある、週休 3 日を導入している会社もある、ただ、日本でこの感覚が当たり前になるには。



4. 12/1（月）「ECU の海外留学生リクルート戦略」

ECU のアニュアルレポートを読み解くとよくわかるのだが、ECU 自体が海外の留学生をいかに呼び込むかって言うことに戦略としての重きを置いている。

これができるのは ECU が素晴らしいコンテンツを持っているからであって、それを本学にインストールするのは並大抵じゃないなと思った。

正直「はい、そうですかね」という感じだった。

オーストラリアは、出生率が増加している珍しい国。呼び込む力のある国。

「できる人が、できる話をしている」、そんな感じ。



5. 12/2（火）「AI 時代の高等教育マネジメント」

「AI 時代の高等教育マネジメント」はこれはもうめちゃくちゃ面白かった。

MBA のコースを教えている SUKU 先生がレクチャーしてくれたが、時間があっという間に経った。

やはり AI に対する考え方がとにかく進んでいて、年代別の分析データで、40 代以降ではじめて AI に対して懐疑的な考え方を示し、年齢が高くなるにつれて比率が上がると言う分析データを見せてもらったときに、やはり 40 代以上がどんどん適応障害になって「老害」になっていくのだなあと思った。

若い世代はデジタルネイティブで、AI を使うのが当たり前。

それがデフォルトで、もう「使うかどうか」の議論は終わっている。次は「何をどう使うか」の段階に入っている。

ここも日本はかなり遅れてると思う。特に本学は話にならない。

ただ、ここは、遅れているなら、追いつくしかない。追いつくには、まず現実を直視する必要がある。

今回の研修は、その現実を見せてくれた。

AI のコンテンツというかアプリというか、私もよく知らなかったのだが、音楽を勝手に作ってしまうプラットフォームがあり、実際に作ってみたのだが、これは面白かった。

曲調やメロディーも選べて、あと歌詞もこんな感じでメランコリックに、とか指定すると思ったような音楽が作れてしまう、結構遊べるなと思った。

遊べる、という意味ではそうだけでも、逆に言えば「そこそこの程度のものが、もう普通に作れてしまう」という意味でも、音楽業界は大丈夫かと心配になった。

私が以前働いていたところでは、例えば稟議はシステムで上げるのが常識だったし、7 年前にアメリカで働いていた時は、営業サポートツールがものすごい進んでいて、チーム全体で初めての顧客から最後のクロージングで売り上げを立てるまでをチームで全て共有できるようなプラットフォームが使われていた。

日本ではおそらくまだ使ってるところも少ないだろう。

このように欧米ではいかに DX を効率化ツールとして使いこなすか重きを置き、使いこなせなくても常に探している。

業務効率化、情報共有、創造性の拡張—こうした点において、デジタルツールを積極的に探し、使いこなす姿勢は、本学にとっても避けて通れない課題である。



6. 12/2（火）「シティキャンパスのガイドツアー」

オープン前で建物の中には入れなかったんだけど、説明だけでも十分に想像力を刺激され、新しいシティキャンパスができればぜひ訪問したいものだった。

壁面に無数の LED ライトが埋め込まれ、プロジェクトマッピングみたいに模様が出たり、色が変わったり楽しめる外観になる予定だそう。かなりワクワクした。

ヒュージャックマンを輩出した舞台芸術学部も、この駅前のニューキャンパスに入り、大小 8 つものコンサートホールも建物の中に含まれる。芸術文化の発信拠点にしていこうという意気込みが感じられた。

しかも、これは「見栄えのいい箱を作る」という話では終わっていない。

先々の収益を考えていて、海外留学生など学生を呼び込むための箱として設計している。マニュアルレポートにもある通り、ECU は、はっきりって企業体である。インベストメントでも稼ぎ、多方面にわたって稼ごうとしている。

日本では大学を企業として認識すること自体がまだ弱いので、その点は、さすが欧米、抜け目がないと感じた。

7. 12/2（火）「西オーストラリア議事堂の見学」

これは、思ったより面白かった。

ちょうど会議が行われていて、議員同士が辛辣で激しい発言を交わしていた。

討論というか口喧嘩というか、ドラマではよく見るけど、ああいうものを直に見たり聞いたりする機会は、実はあまりなかった。

だから余計に面白かった。

あと、12 月に AUS に来たのが初めてだったので気づかなかったが、議事堂の庭にジャカラダの花が咲いていた。日本の桜と同じで、2 週間ほどで散ってしまう。

紫色で非常にきれいな花です。

あれは、よかった。青い空に紫色のジャカラダが浮き立っていて、本当に美しかった。



8. 12/3（水）「大学における計画策定と成果」

大学全体の戦略が、トップの方針から個人の目標にまで一貫してつながっている点も、非常に印象的であった。

大きな理念が細分化され、個々の行動へと落とし込まれている。その積み重ねによって、不整合の少ない組織運営が実現している。

「大学戦略」についても印象が強い。

ECU は、戦略が緻密にいくつもプランニングされていて、トップの大目標から、どんどんと下に降りていって、個人の目標につながってるのがすごいと思った。

これはなかなか難しくて、日本の企業でも最近はパーパス経営と言われていて、1 点にベクトルを合わせて全従業員が動いていくとすることを目指しているのではあるが、なかなか 1 つのトップの大きな目標に個人の目標をつなげていくまでが糸が切れてしまって難しいものがある。

しかし ECU では、かなり前からこの考えに沿った取り組みをしているので、どんどんパイルアップされて、不整合がないようにできてしまってるのがすごいと思った。ここはなかなか説明はできないだろう。そして ECU の場合は学生の満足度が非常に高い。

他の大学と比べても思ったのが、やはり歴史・時間・文化っていうのは時間があって、初めて文化ができてきて土台ができてきて、政策が定着していくと言う。ここは競争力を上げるのになかなか一朝一夕にはいかない。難しい点だなあとしみじみと感じた。特にこの戦略が事細かにいくつものプランニングに枝分かれして、それが 1 つにまとまって実施されていくと言う技は感嘆するだけだった。

9. 12/5（金）「学生ハブのツアー」

「学生を中心に置く」という思想が徹底されていた。

学生の利便性を第一に考えているから、必要な窓口というのは 1 カ所に集約され、来たらすぐ対応できるように、受付番号を受け取って、相談内容に応じて窓口が振り分けると言う方式をとっていて、効率的でわかりやすい導線が整備されていた。

こうした細部の積み重ねが、学生満足度の高さにつながっているのだと実感した。



10. 研修を通じて

何より、今回の研修を通して 1 番感じたのは ECU の職員の目の輝きだった。

すべてのプレゼンターが自らの大学についてイキイキと語っていた。そしてポジティブに未来を考えて語っていた。

大学職員として誇りを持って仕事をしているというのが言葉の端々から伝わってきた。

これは大学自体が ECU が非常に高い評価を得ていて良い大学だと言うこともあるのだが、相乗効果で良い方向へ向かっていると感じた。

また、今回の研修で、私が非常に嬉しかったのは、学生の海外研修でもいつも感じることと同じことが、今回の職員研修でも起きたことだ。

目的意識が低いように見える参加者がいたとしても、現地に行くと、必ず目が光ってパッと輝く瞬間がある。これは 100% 起こる。

このとき彼らの中で起こっているのは、「能動的な気づき」であり、「能動的な学び」である。

自発的な学びだから、その人の中に残る。大人になっても残る。残るから、いつか効いてくる。

長い経験を通して思うのは、教育とは、こちらから一方的に知識を与えたり、レクチャーしたり、情報を授けたりすることではない、ということだ。

いかに相手が自発的に気づきを得られる環境を用意できるか。そこに尽きるのではないかと思うようになった。

それで、今回の研修では、まさに私がやりたかった、学生だけではなく、教育に携わる職員にも学んでほしいと言う思いで温めてきたものであったので、私にとっては、他の 4 人の参加者が、何度も「目が輝く瞬間」を見れたことが 1 番の収穫であった。

この能動的に得た「気づき」と言うのは、必ず我々の中に残るはずであって、これがいつ芽が出てくるのかというのはわからないけれど、奥底にはもう生まれているものである。

今回の研修が、すぐに日常業務に役立つかと言われれば、答えは必ずしも「はい」ではないだろうし、そんな単純なものでもないだろう。

また、今回の研修を終えて感じたのは、自分の立ち位置を少し引いて、「球体的に捉え直す」という意味での価値である。

縦軸で見れば、私たちは過去と歴史の延長線上に立ち、未来へと矢印を伸ばして考えていく存在である。

横軸で見れば、まったく異なる文化や価値観の中に身を置くことで、これまで想像もしなかった発想や視点に出会う。

カルチャーショックつまり、自分の「前提」が揺さぶられる瞬間はある。

この 2 軸を行き来する体験、刺激は、新しいアイデアを産んでいくうえで、すごい重要な材料になる。

そういった意味で、この海外研修は、まさに、「視野を拡げ、視座を高くする（＝球体的に捉える）絶好の機会」となり得るものだと思えて感じた。

9. おわりに

振り返ってみると、私の役目は、大きな湖に小石を投げ入れることだったのではないかと考えている。

その波紋がどこまで広がるかは分からないけれども、もし、静かに広がり、やがて対岸に届くような形になるのであれば、これ以上嬉しいことはない。

本研修の実現にあたり、現地で多大なご尽力をいただいた関係者の皆様、ならびに本学内で様々な支援をしてくださったすべての方々に、心より感謝申し上げたい。

そして、少しでも「面白そうだ」と感じた方には、ぜひぜひ次の機会に参加してもらえたらと思う。このたくさんの「気づき」がより多くの職員に広がってほしい。

ECU に行って、刺激を受けることによって、大きな輪っかになり、同じ釜の飯を食った物同士で大きなサークルになって、本学の中でどんどんパワーを発揮していってもらえたらなと考える。

この経験が、参加者一人ひとりの中で静かに根を張り、いつか芽吹くことを願い、本報告を締めくくる。

